

ブラジル

移民の父
上塚同平

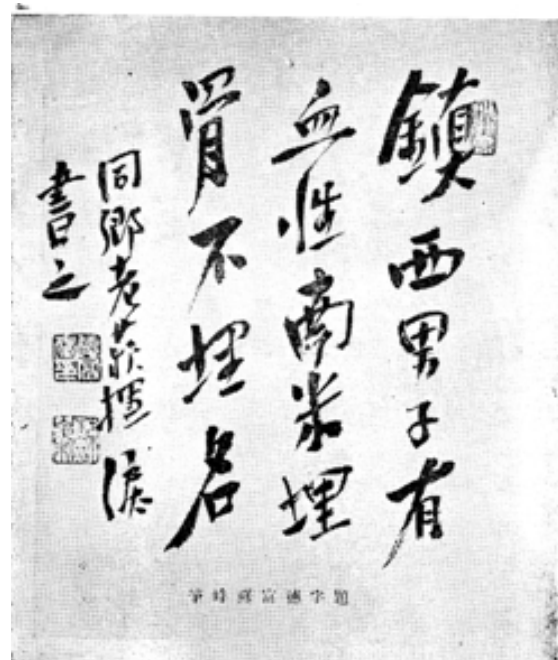
(文庫編集部・「俳人瓢骨」の章のみを収録)



晩年の上塚周平翁



—銅像となつた周平翁—



開拓追懷

瓢骨

泥土蹴破三百里

不飲不食眠山野

少女來招水如玉

休説人生行路難

因に瓢骨とは愚老の俳号にて候 周平

瓢に骨人に氣骨のあらまほし

どつしりと地に尻すゑし瓢かな

序曲 羽根澤生活 春

道つきて露かき分くる萩野かな

塵深き都も夜は萱の里

琢きたる鏡に似たる秋の月

武内着いて直ぐ行く米屋かな

武内行いて帰らず米五升

秋立つや遠山近う見ゆる雲

吹廻はせ床も台所も春の風

在京七年

蹉跎

二十七春風

骨董の買手なきまゝ、春暮るる

稲舟に乗りそこなうて畦を行く

人生意気に感ず

河豚食はぬ男の負けし喧嘩かな

友人得々

花爛漫君が帰朝の日なりけり

武者振の花に乗り込む都かな

春雨に濡るゝ胡蝶の遺骸（むくろ）かな

ブラジル行

南阿の附近カナリヤ島

移民船潮吹く鯨見て着きぬ

サントスの山に瀧あり

涸瀧を見上げて着きぬ渡伯船

移民収容所

異国人間に日出国人の雑魚寝哉

言語不通伯国人習慣親切に「今日は」と叩く
を誤解して

ボンデヤと叩くを怒る新移民

ブラジルの初夜なる焚火祭哉

移民騒擾

当時珈琲一俵のもぎ賃五百レース（二十五銭）、
家族三人にして僅かに一、二俵採取するのみ

夕ざれば樹蔭に泣いて珈琲もぎ

脱走者続出憂慮のあまり

夜逃せし移民思ふや枯野星

秋風や黍の中なる移民小舎

短日や昼灯して珈琲蔵

秋耕や見真似手真似の鋤使

珈琲の樹海に出でぬ枯野草

争議して訴人参りぬ秋の暮

悲観して帰国を思ひ立てる人に
花さがす道迷ふ哉花の山

皇国移民会社倒れ竹村移民生る
新移民朝霧負うて上陸す

コロノ生活激励苦行多年
沈黙でこゝ数年をエンシヤード

帰朝三年有半
逆境の恩寵 事志と違うて成らず

秋風や坂にいたづら馬子の鞭

一縷の希望

高く居て星と紛ふや秋螢

下谷竹町の貧民生活

木下闇洞の如くや梟飛ぶ
掃溜をあされる豚や草萌ゆる
翅破れて胡喋轍の水に浮く

菊池恵次郎の約束を得て再渡伯

雨降りや今日蘇る庭の春

三隅棄蔵方に寄寓

尻高に臥牛の角の蜻蛉かな

政 変

大統領選挙の群の跣足人

移民会社乱立

ヒゲ桃とヒゲナシ桃と畑一つ

イタコロミ植民地

(文庫編集部・ブラジルに戻った上塚はイタコロミ植民地を開いた)

探 検

釣魚を科る木の間の灌しぶき

川豚 (カピバラ) を射留めて堤や大焚火

踊り会ふ黒奴の群や夏木立

頭目の土笛吹いて踊止む

注、土笛はもとブーグレと云ふ土人が土を焼いて角笛のやうに造りたるものイタコロミは土人の旧跡

新墾早々

新聞を敷寝の飼屋泊かな

茅屋生活

我庵の住方わろし秋の風

第二上塚植民地

春の陽や移せる茄子に日覆ひする

闇の夜にピストル提げて夜学かな

破れ垣に葛這ひかゝり秋の風

梅雨漏りに首をちぐめて年賀哉

移民気質

餅食うて禅味俳味の味知らず

天災

甘蔗枯れ麓淋しき秋の山

地変

秋茄子は皆ほどのもの蝕ばめる

麻の音の速くに聞ゆペンを擱く

八十五萬円救済資金

寒空にチエテを渡る荊軻あり

(注) 荊軻は始皇帝暗殺の刺客

救済資金成功

轉の一時に去れり村時雨

プロミツソン開拓十周年

種子によしと縄で記すや初茄子

百姓の換へて白馬や今朝の秋

白百合に乙女の窓の夏来る

大山羊に乗りて童や秋日和

大なる溝飛び越えぬ蜻蛉釣り

柿赤し晒木綿のかけてあり

飛行機を仰ぎて稲を踏まへ居り

酔醒めて眞面目な顔や夜学の師

秋風に盛る南瓜の昼寝かな

繭の玉抱いて鼠の立ち歩く

印度より送られて来し芥子の種子

記念碑の前の植野の村芝居

珈琲統制

短夜や珈琲焼く火の空明り

酒飲まず煙草も吸はず長閑なる

二十五周年

冬に湧く源遠き清水かな

俳道三昧

蝶迫うて疲れし野辺の露寝かな

秋なれや肌寒むければ窓しめて

稲刈りに蔭あれば寝る子犬かな

檜の木蔭藤椅子にかけて読み耽る

客あれば藤椅子すゝむ風の縁

行く春や壊れしまゝのガラス窓

パイネーラ落花の上を猫歩く

熟せざる蜜柑の下や既に径

牛売りに来て手伝へり菊根分

月の出や椰子に伸び来し塔の影

風もなく椰子の丘出る初日かな

落日終焉

発病

大勢で下りてバス押す出水かな

入院

朝顔の一鉢土間に主留守

小康

婢の背より主を炉に呼ぶペリキート
冬越せし茄子花着きぬ春の雨
傘さして霧のお寺に病上がり

終焉

鳥の来てバラ散らしけり朝曇

瓢骨俳句集

(ま) は 『まはき』 誌 中田みづほ選

(ほ) は 『ほとゝぎす』 誌 高濱虚子選

春

(ま) (ほ) 新聞を敷寝の飼屋泊かな

(ま) 印度より送られて来し芥子の種子

(ほ) 春灯や何某画伯鰐描く

(ま) 牛売りに来て手伝へり菊根分

河豚喰はぬ男の負けし喧嘩かな

春雨に濡るゝ胡蝶の遺骸かな

冬越せし茄子花着きぬ春の雨

春雨や傘さしかけて茄子植え

苗床の筵覆や春の雨

湖につき出し畑や耕せる

春寒し見えもへちまも懐手

春泥やヒヨコは親の背にのぼる

大雨に道路壊れて春の行く

餅食うて禅味俳味の味如らず

行く春の堤を行けば捨子かな

晴れて来し春の名残を野に遊ぶ

雨降りや今日よみがへる庭の春

春雷やバラの蕾の震へおり

五位鷺の水に落せし蛙かな

翅破れて胡蝶轍の水に浮く

初雷や貯蔵る薪の小舎造る

西瓜瓜番小屋建つや夏近し

種子によしと縄で記すや初茄子

塗立の壁も流さず春の雨

春雷や茄子に水まく日もながし

春の陽や移せる茄子に日覆ひする

暖や雷に伴ふ太い雨

雨晴るや隣人茄子の苗貰ひ

我屋根に巢寵る鳥や春暑し

春の朝尾を広げたるペルーかな

罇の一時に去れり村時雨

藁葺の目立つ一字や竹の春

稻掛を廻り走りて鬼ゴツコ

藁塚に夕餉志れて遊ぶ子等

眠る山大和樹植ゑて目醒めけり

夏

(ま) 鳥の来てバラ散しけり朝曇り

(ほ) アマゾンの鰐が人喰ふ夏芝居

檜の木蔭藤椅子にかけて読み耽る

客あれば藤椅子すゝむ風の縁

干綱にかゝる蜻蛉や濱日和

(ま) (ほ) 繭の玉抱いて鼠立ち歩るく

(ほ) 大勢で下りてバス押す出水かな

(ほ) 牛啼くや除夜の汽笛に誘はれて

(ま) 排日の辻演鋭や大日覆

(ま) (ほ) 梅雨の部屋

ラムネの殻のちらばれる

(ま) (ほ) 大統領選挙の群の跣足人

(ま) 釣魚を科る木の間や瀧しぶき

(ほ) 朝顔の一鉢土間に主留守

(ま) (ほ) 日本服着し白人やカルナバル

(ほ) 一々の島明かや避暑の宿

(ま) (ほ) 塵箱の浮上りけり梅雨出水

夏草や汽車を見送る牛の顔

掬ひ飲む二度目は濁る清水かな

苔清水踏張って飲み滑りけり

場所かへし窓の机や夏に入る

馬上より帽子さしのべ柿をうく

秋

植ゑし木の霜に堪へつつ栄え行く

秋風や坂にいたづら馬子の鞭

稲舟の流るゝまゝに昼餉かな

チエテーの夜は静かなり天の川

飛行機の音ばかりなり天の川

(ほ) 朝霧や近づいて来る牛の声

(ほ) 乾してある鉢や小皿や散る紅葉

傘さして霧ふる中を病上り

蔓引けば草より転ぶ瓢かな

(ま)(ほ) 稻舟に乗りそこなうて畦をゆく

(ほ) 大なる蜂の巣さがるパイネーラ

(ほ) 百姓の換へて白馬や今朝の秋

今や秋虫の鳴く夜も独かな

蝶迫うて疲れる野辺の昼寝かな

桐一葉落ちて魔州は秋の立つ

一銭で鯛を買うて月見かな

稲刈りに蔭あれば寝る子犬かな

秋なれや肌寒ければ窓しめて

稲刈った跡に稽舌や野球投

珍客に揚ぐや南瓜の仇の花

鹿の音の速くに聞ゆペンを擱く

パイネーラ落花の上を猫歩く

パイネーラ散るや小川の水車

我庵の住み方わろし秋の風

月の出や椰子に伸び来し塔の影

高く居て星と紛ふや秋螢

熟せざる蜜柑の下や既に径

たそがれや背戸を出づれば秋の風

芋掘りし跡の窪みや秋の雨

(ほ) 新移民朝霧負うて上陸す

(ま) (ほ) 藪の面をなでる一朶のパイネーラ

(ま) 大山羊に乗りて童や秋日和

(ま) 古堀に秋の夕日の照り返へす

(ま) 飛行機を仰ぎて稲を踏まへ居り

(ま) 柿赤し晒木綿のかけてあり

(ま) 沈む日や砂丘を吹く秋の風

(ま) 立てかけし箒の先の蜻蛉かな

(ま) 大なる溝飛び越えぬ蜻蛉釣り

(ほ) 干瓢を足で探すや草の中

(ほ) 芋の葉のしらけ変りぬ秋旱

秋晴や駱駝にのりて写真撮る

小夜ふけて鹿立つ崖の高さかな

荒山やイペの花より霧晴る、

(ほ) 尻高に臥牛の角の蜻蛉かな

冬

(ほ) 記念碑の前の枯野の村芝居

(ほ) 婢の背より主を炉に呼ぶペリキート

寒空にチエテを渡る荊軻あり

(ほ) 川豚を射留めて堤や大焚火

(ほ) 涸瀧を見上げてり着きぬ移民船

夕ざれば樹蔭に泣いて珈琲もぎ

(ほ) 神父来て皆振り向ける日向ぼこ

(ま) 神父来て皆立ち上る日向ぼこ

夜逃げせし移民思ふや枯野星

ボンデヤと叩くを怒る新移民

ブラジルの初夜なる焚火祭かな

冬に湧く源遠き清水かな

大霧の下りて忽ち的消えぬ

短夜や珈琲焼く火の空明り

巖頭に人の影あり冬の月

大伽藍破れし跡や冬の月

教会の鐘鳴り出でし火鉢かな

雑

寄す魔州に行くや行かずや帰る雁

水仙の色も香もなき仏かな

老馬の面してタデ食うて下痢しけり

酒飲まず煙草も吸はず長閑なる

新涼や初秋朝の水かぶり

新涼や秋の奥山清水辺り

モダン男や菊の花祈り胸に挿す

鳳仙花夜鷹の家の裏に咲く

校庭や旗竿長し月の影

菊の庭翁踊は酒宴なり

跛馬買うて戻れば秋の雨

（文庫編集部 原本の状態が悪いため、スキャン原稿は同じ内容を復刻した「イツペーの会」刊行のものを使用しました。以下に同本の「あとかぎ」を載せます）

あとがき

「ブラジル移民の父」上塚周平（一八七六～一九三五）は第五高等学校で学んだ、夏目漱石の影響で俳句を始めた。俳号は「瓢骨」。日記を書くように句作し、ブラジルに渡ってから死ぬ直前まで四千句以上作ったと言われている。

現在上塚自身の著作物がなく資料もないため、その全容はつかむことができない。幸いにも昭和十五年発行、竹崎八十雄（旧大江高等女学校長）著「上塚周平」末尾に代表句が収録されていてその一部を知ることができる。俳人上塚周平の世界を多くの人に知っていただけたらと、同著から抜粋して小冊子にした。

前半は東京帝国大学時代から辞世の句まで上塚の人生の軌跡をたどって編まれている。後半は「まはき」誌（中田みずほ選）と「ほととぎす」誌（高濱虚子選）からの「瓢骨俳句集」となっている。重複句もあるが、生涯を移民の労苦に寄り添った上塚のこころを偲んでいただけたらと思う。

二〇〇八年は上塚が移民船笠戸丸で七九一人を率いて渡ったブラジル移民百周年に当たる。上塚周平

顕彰「イツペイの会」百周年記念事業の一環として、
関係者のご理解ご協力でご出版できたことは何よりも
の喜びである。

二〇〇八年十月

上塚周平顕彰「イツペイの会」

会長 米原尋子

収録の俳句は竹崎八十雄著「上塚周平」（上塚周平
伝刊行会発行）によった。

発行所 上塚周平顕彰「イツペイの会」
発行者 米原 尋子
〒861
-4235 熊本県下益城郡城南町
千町二五三一
TEL 0964 (28) 3656